

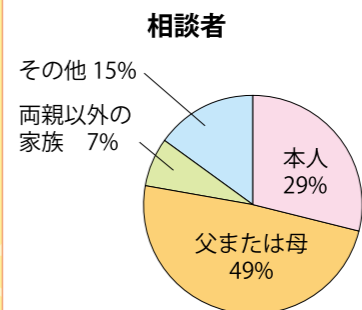
京都市ユースサービス協会が「子ども若者支援事業」に取り組み始めてから、6年が経ちました。相談窓口には、この5年間で約2000件もの相談が寄せられています。その内3割を占めるのが「ひきこもり」の相談です（※）。日々「現状から一歩踏み出した若者」や「家庭内では解決が難しく、疲弊された保護者の方」など様々な方が相談に来られています。

きこもる若者 みまもる家族「コミュニケーションの視点から」と題して、講演会と交流会を実施しました。当日は、京都市内外から本人やその家族、支援者や関心のある方など、第一部、2部合わせて定員を超える約190名が来場されました。

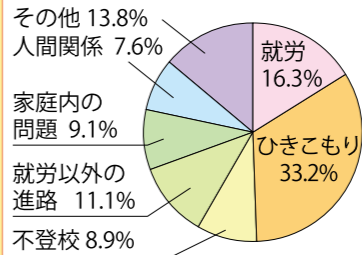
つなげる機会にもなっています。このように、子ども・若者支援室では、相談を受けるだけではなく、

他機関と連携したり、他機関同士をつなげるなど多面的な方法を用いて支援を行っています。

※子ども若者総合相談窓口の相談割合



相談内容



### 第1部 講演会

講師：長谷川俊雄氏  
白梅学園大学 子ども学部子ども学科教授  
社会福祉士、精神保健福祉士

「病気で入院している人に、外に出なさいと言うのでしょうか。ゆっくり休んで良くなって、元気になったら出てきてねと言うのではないのでしょうか」  
講演の中で長谷川先生は、常にひきこもる若者を思いやりながら話されました。1981年から

ソーシャルワーカーとして始められた現場実践の経験から、ひきこもりを「社会に出ることに慎重な態度から生まれる苦悩を表現している若者」と「自死を選択しないで生き延びることを選択した若者」と表現されました。そして、先生はいつも彼らに対して、冒頭の言葉の通り、病気の方にそうするようにまず辛い、生きることを選択したことを褒めるそうです。

にも起こり得る」と初めて明文化されました。同様にひきこもりも特別な若者ではなく、誰にでも起こり得る社会の課題でもありません。一度ひきこもった若者が、もう一度社会に出るには、まず家庭の中で安心してひきこもることが必要です。そのため、保護者の方には相談機関に対して「解決方法を求める」のではなく、「一緒に子どものことを考える場」「想いを吐き出す場」として活用してほしいと話されました。



### 第2部 交流会

ひきこもりをはじめ、生きづらさを感じる若者が外に出る機会として、様々な団体が活動をされています。講演会の後は、そのような団体に相談できるブースが用意され、こちらも盛況でした。今回はその中から3団体を紹介いたします。

#### エイドネットCafe

居場所・学習支援・相談

オンライン家庭教師を運営する会社による、若者のための居場所です。京都市営地下鉄烏丸御池駅から徒歩2分とアクセスが良く、月2回の相談日や年4回程度の食事会、講演会など、初めての方も参加しやすいことも特徴。Cafeは、毎月5日と15日とイベント時に場所を開放されていて、お菓子を食べたりゆっくりお話しをしたり、学び直しや交流の機会のお手伝いをされています。ご家族の相談もできます。



#### 勇気の出るライブ 実行委員会

集団活動（音楽）

生きづらさを感じている方の自己表現の場を、ライブというかたちで作られています。代表の田中暁氏は、周囲の視線が怖くて電車に乗れませんでした。音楽活動をきっかけに克服した経験を話されています。このことをもとに、「前に出てみて気づくこともある、まずは一度イベントに来てほしい」と話されます。実際イベントでは、即興で歌ったり、落語をしたりと自由な雰囲気。もちろん、問い合わせから来られるまで1、2年かかることもあり、参加は大きな一歩ですが、リピーターが多いのも特徴です。このほかギター教室もされているなど、利用者同士のつながりもできるとのこと。

#### ワークパートナーYUI

居場所・集団活動・就労体験

就労移行支援A型事業所による、就労体験ができる場所です。今年度は延べ80名近く利用され、この体験をきっかけに就労移行支援を始められた方もいます。半日体験や近くの駅への送迎など、個別のフォローにも対応されています。もともと障害は個性という理念で、就労移行支援が行われており、そのノウハウが就労体験にも活かされています。就労体験は、18〜39歳のひきこもり経験や働くことへの自信がもてない方が対象。「できなかったことが少しずつできるようになり、できることを仕事とマッチングさせる。変わったことはしていない。普通に接しているだけ」とスタッフの方が話されるように、新しい体験や違った環境に慣れるきっかけづくりをされています。



食事は、お好み焼きやクリスマスパーティーなど楽しいイベントを企画されています。